

て、氏は小林の批評対象と批評家小林とを生きる、生きさせる、そのような一層自在になった一筆一筆で静かにひたひたと書き進み、批評の魂の实在を明確にする。「批評の魂」は、氏が立教大学を去られて間もなく連載が完結し、単行本化されると聞いた。私はいまからもうそれを心待ちにしている。

解題 | 前田英樹『ベルクソン哲学の遺言』

岩波書店、2013年

山本 尚樹

やまもと なおき

立教大学 現代心理学部映像身体学科助教 発達心理学・生態心理学

078

鉛筆をカッターナイフで削る。木目の流れか、思わぬところまで刃が届いてしまう。または、少し硬い部分があり刃が思うように通らない。黒い芯が出て尖端の形があらまし整うと、カッターと鉛筆の持ち方を変え、小刻みに刃を滑らせて芯をとがらせる。「鉛筆を削る」、そう言葉にするとなんということはないが、いざ鉛筆を削るとなるとちょっとした「障碍」に次々に遭遇することになる。ここでは鉛筆を例に挙げたが、絵画や映像作品など何かをつくる場面では、大なり小なりそうした障碍と関わらざるを得ないのではないか。もちろん、絵の具や筆、撮影機材が勝手にならないということもある。それに加えて、自分は今回この作品で何を表現したいのか、どのような方向性で製作を続けたいのか、そうした制作の「テーマ」というものもある。テーマというと、作者の頭のなかにある表現意図と思われがちだが、すんなりと作品に示されるものというよりは、まさに作家が格闘しなければならない障碍のことである。

このように障碍と格闘し続けるのは、作品をつくり出す作家だけではなく、いわゆる哲学者や科学者と呼ばれる人も同じなのではないのか。彼らはすでにある理論や図式で物事を思弁的にただ説明しているのではなくて、「物はどうのように動いているのか」「心とは何か」といった、我々が普段気にも留めないことにぶつかってしまい、格闘しているのではないのか。障碍に出くわし格闘するという点

では、作家も哲学者も科学者も、案外同じことをしているように思う。

そんなことを考えたのは、前田先生の『ベルクソン哲学の遺言』を読んだからである。ベルクソンは19世紀中頃から20世紀前半を生きた人であり、普通は哲学者として位置づけられる。ただ、この本は一般的な哲学研究書のように書かれていない。ベルクソンが一生をかけた思索の歩みが、哲学領域の予備知識がない読者でも追っていきけるように平易で簡潔な言葉によって書かれている。その意味で手ぶらで読める本と言える。

しかし、だからと言ってこの本はベルクソンの哲学を手っ取り早く理解できる入門書といった類のものではない。むしろその逆で、じっくりと時間をかけて向き合う必要のある本である。まず、この本はベルクソンの遺言の真意とはなんだったのか、という問題に前田先生が向き合うことから始まる。そして、その遺言を残すに至ったベルクソンの一生をかけた思索の「方法」が、障碍と遭遇し格闘する、まさにそうしたことであったことが確認される。このことを糸口にして、ベルクソンが最初に遭遇した障碍と、そこから続く格闘の歩みへと前田先生は筆を進めていく。こうした書かれ方をしている以上、読者は頭から順に、そこに書かれていることを丹念に追っていきながら、それこそ格闘していく必要がある。

そうしたベルクソンの思索の歩みとはどのようなものであったのだろうか。何度かこの本を読んで、僕が辛うじて追えたベルクソンの思索の歩みを、ごく一部ではあるがスケッチしてみたい。

まず、ベルクソンはどのような障碍に遭遇したのか。それは、普段は覆い隠されているけれども我々が確かに経験している、実在の時間という問題である¹。時間の流れというものを考える時、我々は時計の針のようなものを思う。そして、時計の針の動きは、じっと静止して一定の間隔をもって配置されている時計の目盛りから、一つ、二つ進んだ、という風に測られる。ここでは、時間の流れは均質で寸分変わらない反復する単位として数え上げられている。カレンダーなども同様の理屈であろう。こうした時間の捉え方の中で、我々は10分後にあのひとの待ち合わせの時間だ、ということを考えて行動するし、逆に、10分前にはあの場所にいた、と考えることが出来る。このように、我々は時間の流れを物差しが目盛り上での移動のように考える。

1 ここていう実在の時間は「持続」と呼ばれるが、本稿では特殊な用語の使用は避ける。

しかし、我々が経験している実在の時間は、そうした考え方では決して捉えることのできないものである。紙に塗った絵具が乾くのを待つ、眠ろうと布団に横たわりまどろむ、夕暮れの色彩の現われに目を奪われる、そのなかで刻々と現れ、感じとられることがある。その中で現れ感じ取られていることは、目盛りを刻むようにして繰り返されるようなものでは決してない。そして、それまでの出来事の集積としては説明できないような、新たな質が絶えず感じ取られている。均質性、反復性を前提にした時間の計測を前提として、我々の生活は営まれ、また様々な科学も発展してきた。しかし、そこには我々が確かに経験しているところの実在の時間はすっぱり抜け落ちていく。それは、本来なら生物の不可逆的な変化のプロセスを扱うはずであった進化論についても同様であった。こうした実在の時間という障碍に、ベルクソンは遭遇し、格闘することになったのである。

ベルクソンは当時の進化論を検討する際に、この実在の時間という障碍に突き当たったらしい。しかし、そこからすぐに進化という現象と格闘し始めたわけではない。先ほど実在の時間ということを確認する上で、何かを待つ等の心的経験の領域をとりあげたが、まずはそうした心という領域から出発して、ベルクソンはこの障碍と格闘しなければならなかった。

とはいえ、この実在の時間は、心という領域に限定した事象ではない。微妙な色艶の変化を伴いながら絵具が少しずつ乾いていくように、また本がゆっくりと黄ばんでいき紙が脆くなっていくように、目の前にある「物」も、それ自体の変化のプロセスを経ていく。時計の目盛りで示される時間を我々は思考の上では自由に戻したり先に進めたりすることが出来る。しかし、水に落としたインクの拡散や紙の黄変は、私の知らないところで進行していく固有の変化のプロセスである。目の前の壁に勢いよくぶつかれば弾き飛ばされるように、物は決して私の勝手にならず、そこにある。

では、我々はどういうにして、自然現象や物の変化、それ自体に触れることが出来るのか。この問題について前田先生はベルクソンの言葉を読み解きながら、その変化を端的に「見ている」という、一見するとごく当たり前のことを指摘する。インクを一滴落としてから水が一樣の色に染まるまでのプロセスを見ている時、その変化のプロセスと、私の心に次々と現れ出ること——色の拡散の現われの見えや、それを待っている間の心情的な変化——の流れは、二人のダンサーが、それぞれ固有の身体を持つにも関わらず一つの身体として同じリズムを刻んで踊るかのよう、調子を合わせる。この「見ている」ということにおいて、二

つの変化のプロセスが調子を合わせるということは、夕暮れの色彩を見ながらたずむときにも生じているだろうし、例えば紙の黄変に気づき、日が当たらない場所にその本を何か月かぶりに動かす、というときにも生じているのだろう。物や自然現象は我々の思考によっては勝手にならないが、私たちはそれを見ながら（もしくは視覚以外で感じることもあるが）自らの行為の調子を合わせていく。四季の流れに合わせた農耕の営みもそうしたものであろう。もしくは、インクが拡散するのを待ちきれないときは、棒で掻きまわすといった行為によってそれを早めることもある。四季の移り変わりを、強くまっすぐな太陽の光とその下でざらざらと輝く風景に、枯れた色に徐々に染まりつつもなお鮮やかな色彩で燃える紅葉に見る。このように我々は見ることを通して、物のもつ時間の流れに触れるのである。

このように実在の時間という問題は、我々が物と共にありながら日々の営みを続けていくことや、それを見ているという「知覚」の問題へと繋がっていく。そこからさらに進んでいき、記憶の問題、進化とそれに関わる身体器官の問題へと続いていく。我々が経験する実在の時間が、決して同じ形で反復することなく絶え間なく現れ過ぎ去ってゆくことなのであれば、記憶とはなんなのか。それは、脳などに蓄えられる静止したなんらかの状態としては捉えられなくなる。むしろ、我々の普段の営み、つまり何かを避けるだとか親しい友人と話し込むといったことと結びついた、それ自体も変化の途上にあるような動的なものとして捉えられる。例えば、向こうから人が来たときぶつからないように反射的に半歩ほど身を避ける。それはまるで過去何度も道端で見かけてきた石を避けるかのような。しかし、その人が慣れ親しんだ昔の友人であると感じたとき、その人の相貌がかつて見た相貌を呼び起こしながらも細部まで浮き上がってくる。そして、久ぶりにあれこれと話すうちに、共に過ごした過去の様々な出来事が思い出される。このように、今の行動と結びつきながら記憶は肌理が荒くなったり、細くなったりしながら立ち現われてくる。また、進化やそれによって生じたであろう様々な身体器官も、我々が知覚を通して物に触れながら営みを続けるということと結びついたものとして捉えられる。眼という器官はレンズ眼、複眼など、仕組みとしてはごく限られた種類しかないが、それは生物が光という物理的現象の方にその身を合わせようとしていった、その産物なのだろう。こうしたベルクソンの思索の歩みを、前田先生は精密な言葉で追っていく。

さらに、実在の時間の巨大な流れである進化のなかで、人類が獲得してしまっ

た知性と、本来は行動のため外に向けられていたはずの意識を内へ向けることで開かれた内的な自己意識の領域へと、歩みは進められていく。本来は生存に向けて働く知性は、自らの生の運動がやがては無に帰すのだという「死の観念」や、人の内的領域のうかがい知れなさ、つまり他者への疑念を内に孕むようになる。生へと向かう運動がひたすら進んでいった先に、このようにある意味では捻じれた副産物、障碍が内に生じてしまった。しかし、我々は自らに確実に来る「死」というものを知るがゆえに、自らの生を決める人がいることを知っている。または、人が裏切るということに対して、一時の慰みを求めたり、そうしたことを含めてなお共に生きるという選択が出来たりすることも知っている。そして、こうした障碍に対して立ち向かおうとする欲求から、人の共同体の中に様々な小説や戯曲などの物語や、宗教が生み出されていった。それらの持つ機能によって、かろうじて私たちは安らぎや連帯を得るのかもしれない。しかし宗教などの社会的装置によって連帯を保つ共同体は、他の共同体と争うのかもしれない。

こうした人間の共同体の生存にまつわるベルクソンの思索は、本書の後半に出てくる話である。しかし、ベルクソンは最初からこのようなテーマについて考えていなかったはずである。自らの心が触れているところの实在の時間という、ある意味では非常に身近なところにあった障碍と格闘し、そして新たに遭遇した様々な障碍と格闘していくうちに、こうした共同体や宗教という問題にまでベルクソンが達したということは、驚くべき事実ではないのだろうか。このことは、ただ目の前の障碍に向き合いながら日々の仕事をこなしていく職人が、ただ木を削るということのうちに、日本という島国の資源と密に結びついて発展した鍛冶の営みや、樹木の生の息遣いを見て取ることと、どこか似ているのではないか。

この解題では、僕が辛うじて追えた思索の道筋をスケッチしたが、ここでは触れることのできなかった様々な問題がこの本には含まれている。特に、物の時間の知覚との関連で論じられる、映画フィルムの動きの知覚とそこに生じる調整という問題は、少しでも映像に関わる者であれば誰しも引っかかるざるを得ない障碍であろう。

この本は、読む人に応じて大小様々な障碍が立ち現われるような、そうした本である。そして、ある問題についての答えが書かれているというよりは、各自がその問題をどう考え、格闘すればよいのか、宿題を与えてくれる本である。

この解題の最初のほうに、障碍に出くわし格闘するという点では、作家も学者も案外同じことをしているのではないのか、と述べた。この世にはいろんな職業

があるが、どうせその道に進むのであれば、そこで出会う障害と格闘し、そしてまた新たな障害と格闘していく歩みのほうが、厄介で大変だけど楽しいのではないのか。この本は、ベルクソンという人物が真摯に歩んだ、そうした厄介だけど、おそらくは楽しくもあっただろう道りを描いたものと言える。だから、映像や身体の問題に興味がある学生はもちろん、ダンスや演劇、映像制作に興味のある学生、どのような学生でも一度はこの本をゆっくりと時間をかけて読んでほしいと思う。この本を読むということは、学者、作家、どのような道にも共通しているだろう、障害と格闘し続けるということ、その態度に触れることに他ならないからだ。

ところで、ベルクソンは自身の最後の著書で、宗教の成立後のさらなる進化のプロセスの果てに、聖パウロや聖テレサといった「神秘家」が現れると考えたそう。神秘家は、その端的な行動によって、熱を人々へ伝えていく。そしてそのことが社会の変革につながっていくような、そうした存在である。しかし、そうした生の在り方は、宗教の領域、神秘家に限られるのだろうか。一人の人間の真摯な仕事は、多くの人を揺り動かし、また後世の人々の仕事や生き方に大なり小なり影響を与えることを我々は知っている。そして、そうした人は、実は普段見慣れた街にもいたりするものである。この学科からも、その行動の持つ熱によって人々を揺り動かしていくような、そうした人が出てくるといいな、と思う。

解題 | 前田英樹『小津安二郎の家 持続と浸透』

書肆山田、1993

三宅 隆司

みやけ たかし

立教大学大学院 現代心理学研究科映像身体学専攻博士課程後期課程 映像身体学

『『晩春』の紀子、あるいは『秋刀魚の味』の路子が嫁いでいったあとの無人の部屋のショットは、そこに暮らした娘たちの現在における不在を表象する記号で